

第1回文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第一回目の文芸思潮新人賞に、鋭意御応募くださいまして、まことにありがとうございます。二九篇の応募数でしたが、その内容は素晴らしく、優れた気鋭の作品が多数寄せられました。これまでにない新鮮な文学世界が開かれ、まさに新進気鋭の鮮やかな言語世界が切り開かれました。心から御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。

第一回文芸思潮新人賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、コロナウィルスの関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、縮切、審査料などすべて同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

優秀賞

なし

奨励賞

「転生」

中山喬章 (京都府京都市)

「その重さの金と同価値な」

芦田孝祐 (福島県大沼郡)

「シエアメイト」

河村直希 (埼玉県大里郡)

最優秀賞

「光源」

北谷ゆり (福岡県豊前市)

「赤白休暇」

石田夏穂 (東京都豊島区)

「桃と煙草」

深澤眞歩 (東京都品川区)

佳作

「大根運び」

絃世新土

「神無月のウソ」

うみのまぐろ

「白痴夢」

檀もも

「アンダーグラウンド・マザー」

紅露 冴

「河童の一人酒」

アイリス・ニック・クロウ

「案山子」

齋藤圭介

入選

「シマウマの国」 千久光太郎

「少年と巨人」 櫻井 瞳

選評

極めて優れた言語感覚

五十嵐 勉



第一回の「文芸思潮」新人賞は、応募作品はわずかず二九篇だった。新人賞でこれほど少ない応募数も稀だろう。しかし中身は素晴らしかった。賞の特異な点は、たとえ一篇しか来なくとも、それが素晴らしい作品であれば満悦至極万歳であり、一〇〇〇篇集まっても駄作ばかりで称揚すべき作品がなければ、大失望落胆虚無奈落である。その意味からは、第一回新人賞は審査員一同狂喜に近い満足度で、御機嫌で酒宴に及んだのが事実である。

特に優れた作品が三篇あり、どれも高い言語感性を備えていて、完成度は言うに及ばず、現代を捉える新鮮さに溢れ、新しい世界を提示する、正に新人賞にふさわしいものだった。

およそ新人というものは、それまでの既製の作品には見えて、大いに安心した。未来は広がっており、託すに値する力を得た。

しかも今回は一人だけでなく、三人だったことも豊漁感に包まれた。二九人中三人が当選に値するということは、確率からすれば快挙であり、奇跡に近い。またそれに準ずる作品もレベルが高かったことを考えると、この世代への期待感はずばりである。

三人に共通するのは、卓越した言語感覚で、言葉を駆使する自在な飛躍力に加えて、現代の若い世代でなければできない闊達な躍動がある点である。

まず最優秀賞当選の北谷ゆり氏の「光源」から見よう。「彼、青っぽい雰囲気纏っている。然有らぬ趣で、ほやほやとうすら青い明るみ醸成するかと思えば、鮮烈でカブトガニの血痕のように、たらたらと流れて消えぬ血痕を足取りに残して、肌に触れるものすべてを染めつくしてしまふ。その血腥さはとくに、雄雄しいんだか、女らしいんだか執着した性欲に掻き立てられている最中は濃厚だ。」

肌を接する交わりを通して描写される一人の男性への輪郭は、触感とイメージのうちに青さと血の濃厚さを溶かして、肉感としての彼を浮かび上がらせる。異性は小説の中で肉体の対象としてあるだけだが、そこに紡がれる言葉の重奏の豊かな逆りは新鮮な弾力で生きた言語空間を繋ぎ

られなかった何かを備え、新時代のある部分を引き受けて、それを自在に駆使展開し、新感覚の言語造形をなすものだろうが、これらの著者三人は、ものの見事にそれを体現している。

賞をスタートさせるとき、半分は不安があった。

一〇〇〇篇を超える応募者数のある大手の文芸誌の新人賞作品には、このところそれほどうまいものがなく、レベルもトーンも下がっている現実があり、大学で文芸関係の講師をしている知人からも、学生たちが志賀直哉や川端康成や三島由紀夫や大江健三郎など過去の作家作品を読んでいなければかりかその名前さえ知らない事実を知らされたり、スマートフォンによる安直な文章に興じ、画像や音楽をもっぱら優先させていたりする光景を目の前にするとき、若い世代が総体的に濃密な文章や文学から離れ、結果的に文芸創作の能力そのものが落ちていっているのではないかと危惧したからである。二九人という応募者数を突き付けられたとき、その不安は最大になったが、三篇その他に触れてそれは霧消した。

それどころか、この三人には、我々の世代以上に、またこれまでの作家以上に、極めて優れた言語感覚があることを認め、その能力の高さに敬服した。世代による言語感覚の後退など杞憂に過ぎず、むしろ進化していることを確認

でいく。現実との接点を残しつつ、言葉は舞い、ストーリーをぼんやりと描きながら、次の言葉の蜜を求めて、世界と交わっていく。

ここに見られる言葉の躍動性と転力は、詩的でありながら、また詩とは異なった言葉の造形力を示して、世界を蚕食していく。それらの言葉の駆使は、生半可な鍛錬では得られない、不測の蓄積と挑戦意欲を蔵している。その言語構築はすでに深い領域に達している。これまでの散文の限界を突き破って、新しい領域を開拓している。

無論読者は、言葉の舞踏に魅せられながら、どこへ連れていかれるのか、朦朧とした不安に包まれる。ストーリーは、触感と表裏の舞踏の影に隠れて、はつきり見えないからである。ここでは、恋人に普段のセックスとの違和感を覚えられて、追及され、強姦されたことを告白し、怒った恋人が警察に連れていって、取り調べを受けさせるといふのが現実の流れなのだが、犯されるシーンに性の根源的な衝動としての光源を見る深い遡及がテーマになっている。

この流れの果てには、現在の恋人とも別れることになる結末への暗示は、奥行の深い造形をなして、筆者の小説構築への並々な傾斜を示している。

おそらく読者は、もつとストーリーをわかりやすくしてくれ、背後に沈めずに、はつきり表に打ち出してくれ、と

主張するだろう。しかしこの筆者にとつては、そういう現実そのものが二次的なものであり、求めている世界に付着してくる夾雑物にすぎない。だから曖昧なまま、流されるままのものでいい。警察さえ現実の模様の一部分にすぎない。

こういう世界を書き続ける作家は、これからのような展開を見せるのか、興味深くもある。光源を求めて舞い続ける蛾のように、吸い込まれることを究極とするのか、それとも舞そのものを独立させていくのか、肉体が伴うだけに、様々な想像を掻き立てる。しかし現代という局面において言えるのは、バーチャル空間の広がりの中で、生身の実感に根ざしている強みがあることである。仮想の迷妄の氾濫の中で、こうした実感こそが屹立し得るのかもしれない。減びを見つつ生物の本源に迫る切り結びの覚悟が、未踏の領域を開くだろう。

石田夏穂氏の「赤白休暇」は、鋭い言語感覚のうちに現代の空間性を取り入れて、一万キロ以上隔たったインドネシアの地と空港やロシアやトルコからメールで発信して繋がりを描くところに、現代でなければ構築し得ない恋愛の傷みを浮かび上がらせている。メールを通して確認されるインドネシア青年の環境と立場の違いが、地球規模の空を駆け巡る広がりの中に明らかにになり、結ばれず断ち切る

葉の奥行によって響き合う深まりではなく、紡ぎと紡ぎの間にある飛躍性のおもしろさだろう。次から次へと繋がって同時に裏切っていく言葉の新鮮な意外性は、現代の淡い色彩とリズム感を伴って、快適に流れていく。その弾力はダンスのような軽快感がある。書き出しからすでにそれに魅了される。

「桃味と煙草は口の中に貼り付く。／だから嫌いだ。／バナナの味だとか言われてもらったタバコを灰皿にぎゅー、と擦り付ける。アコーデオンのように縮んでいく。どう見たって汚い灰が赤い光をまだ内側に宿したまま、ぼろ、と私のかける圧力から逃れてこぼれる。」

ストーリーも意外性を孕んでおもしろく進んでいく。独特の文章ダンスに乗せられていくようだ。出会い系メールで顔を合わせた相手が予想に反して男ではなく、女で、その名前が「モモ」だったり、それに合わせて自分を「タバコ」「バタコ」と繕ったり、グングン引き込まれていく。「『あなたの名前は』／モモが悪そうな笑顔で聞いてくる。どういう意味の笑顔なんだ、それ。私は本名を名乗りたくはなかった。そういえば桃って、私の嫌いな味じゃん。」ここにある人間の付き合ひ方は、根や属性を消して、親しみや温もりという直接的な感覚で繋がりが、交わっていく。連絡を取り合ったメールを消してしまえば、それきり相手は現実

しかない傷として、痛みと疼きを発しつつ、尾を曳いていく。それぞれの言葉の感覚の膨らみは少ないストーリーはわかりやすく、菌切れよく、シーンは進んでいく。その移動に現代の通信による地球規模の意思伝達を現在進行形として乗せていく。ここにあるのは、一つの恋愛や一つの傷みの世界化であり、体験の絶対性が地球を包んでしまふ恐るべき広がりだ。地球の裏側にまで離れている距離を断ち切ることなく、どこまでも繋がっていく、情緒の屹立性が露わになる。一人の人間の中に燃え燃える情緒が、地球に孤独に浮遊する感覚を取り出して見せたところに、この小説の新鮮さがある。ここを抛り所にして、宇宙に浮遊する情緒の絶対性さえ主張できる可能性も秘めている。前半の孤独な旅の感覚に比べて、後半の家族との旅行シーンは、その繊細な鋭さがファミリーの温もりによって減じてしまっているのがやや惜しまれるが、この空間性の基軸に目を向けた新しい文章構築は、現代文学に斬新な領域を広げていきそうな気配がある。国際結婚や海外留学や海外事業が増え、土地や歴史から離れた場に身を置くことの多い現在、その状況の中で的情緒や命のあり方を求める純文学小説の領域が現代の要請として求められている。この小説はそれに応える作品の一つになっている。

深澤眞歩氏の「桃と煙草」の言語感覚は、それぞれの言の中から消えていく。再び探すこともできない。バーチャル世代の社会観や世界観が露骨にぶつけられてきて、あるしつかりした生き方として迫ってくることも魅力の一つだ。会話のおもしろさ、捉え方のおもしろさ、言い回しのおもしろさは、文章のおもしろさとなって、どこまでも流れていく。散文文章の楽しさを備えた希有な才能だろう。今は若さに寄りかかっている部分も感じるが、現代という舞台や道具をいつでも取り込める才気も併せ持っていると思われ、この楽しさを失うことはないだろう。

本来最優秀賞を三人に授賞することは躊躇われるのだが、この三人の傑出した才能には敬意を表するしかなかった。これはまた若い世代の文学への信頼にも繋がっている。この三人の力量は、もつと世に出て行っていいものを有している。商業文芸誌で賞を取るだけの力は十分にあり、それが実現しないならば選ぶ方に力がないというべきだろう。

奨励賞の中山喬章氏の「転生」は、題材は興味深く、人類学のフィールド調査に行った女子学生が、パプアニューギニアの貨幣経済の及んでいないある村で、濃い体験をして戻り、それを修士論文にして就職するのだが、抜け殻のようになっている。指導教員は不思議に思っ、自分も現地に引っついてみると、そこに彼女がいる。日本に戻った彼女は抜け殻で、真の彼女はそこを楽園として生きている。気

がつくと、自分も彼女と同じになって、抜け殻が日本に帰っていく姿を見る、というストーリーだ。この世には不可解な現象が無数にある。文明を逆照射する鋭さを帯びたこの作品は、インパクトがあり、意表を突かれるが、反文明は零円気や匂いとしてはわかるが、重要なその本質に切先が届いていず、対極に位置する原始生活の楽園性の根柢が希薄になっている。この二つを抉った上で、このストーリーを重ねれば、衝撃性は増しただろう。着想は鋭い。

河村直希氏の「シエアメイト」も鋭利さを感じさせる作品で、同居する相棒が犯罪を起こし、彼を求めて来る人間たちや警察とのやりとりが、スリリングだ。最後に相棒から拳銃まで託されるストーリーはおもしろく、筋の組み立てに力を感じさせる。ただ、この主人公が作家志望で、創作に悪戦苦闘している姿や、性の欲求を蔑み気味に書いている自堕落感も余計で、作品の品格を落としている。難しいが、他にやり方や表現方法があったかもしれない。伸び代のある書き手だろう。

芦田孝祐氏による「その重さの金と同価値な」は、文章の密度と流れに快いものがあり、読ませる力は高いレベルに達している。大学生生活の断面を生き生きと切り取って、そこに友情のねっとりした部分と男女間の歪みを組み合わせ、そこで、奇妙な交差空間を描き出している。数学科の学生ら

内と外を抽出する筆力に呆然

小浜清志



初めての文学賞でどんな作品が舞い込むのかと期待しながら、一抹の不安も抱いていたがふたを開けてみればそれはまったくの杞憂で、当選作が複数になるとい思いもしなかった結果になった。

今回は選外や佳作の方から選評をする。

「河童の一人酒」アイリス・ニック・クロウ シアトル生まれで十九才で交換留学生として来日し、現在は農家の夫と子供三人で帯広に住んでいるという経歴に目が釘付けになった。荒唐無稽な青エゾ河童の話より日本に住むことになった経緯を小説として書いて欲しいと思った。これだけの日本語が綴れるということは英語での文章も達者であるだろうから、日本でのくらしを米国の人に知らせるのも良いのではないかと一人酒をしながら夢想した。

「大根運び」絃世新土 私がシナリオの講座に通っていたころ講師の映画監督が教壇に立つなり今日は皆さんにてっ

しい論理の飛び交いも、効果的にそれを盛り上げている。しかし数学の美しい解き方を見て感心する以上に、テーマの深さや普遍性を求められた場合、湧き出してくるものがあるか、心許なさを覚える。これはタイトルにも反映されていて、感情の膨らみより物理的な美しさに比重がかかる傾向は、いつか変成に迫られるかもしれない。

惜しくも佳作に留まった絃世新土氏の「大根運び」は、大根の運搬作業に、戦時中の死体の足の運搬を重ねて、平穩のうちに潜在する激烈な現実を呼び込んでいるが、重なり合う結節点が希薄で、連想のうちに留まっていることによつて、虚構の強度が足りなくなっている。着想はいいが、十分な説得力に欠ける。文章の定着性も歩みが地を得ていず、観念的な主張が先立って、流れていない。小説の文章を獲得することによつて、大きなテーマが生きてくるだろう。次回に期待したい。

小説は特に持続力が必要で、今書ける状態も次に続けていいものが書けるとは限らず、今未完成な人も、続けることによつてすごい大作を完成することもありうる。地味な不断の情熱の持続と努力が、小説創作には必要である。

ここに集まった才能ある若者たちがさらに成長していつて、今後日本文学のさらなる新たな花を大きく咲かせていくことを期待している。

とり早くシナリオライターになる方法をお教えしようと思り出した。皆が固唾をのんで講師の次の言葉を待った。講師は黒板にシナリオライターと書き前列に座っていた者の名前を聞きそれを書いた。そして、連絡先をここに書いた名刺を作ればもうシナリオライターです。明日からその名刺とシナリオを持って映画会社に行くのですと真顔で言った。職業小説家なら出版社に原稿を持ち込むべきです。

「その重さの金と同価値な」芦田孝祐 会話のテンポのよさに引き込まれて一気に読み進んだ。堺と世界を共有できる自分が誇らしい。その重さの金と同価値の世界だからねと打ち明けた後、公園で四本のビールをゆつくりと空けた。小説の膨らみとはゆつくりとビールを飲む時間をどう表現するかではないだろうか。

「転生」中山喬章 未だ貨幣経済が浸透していない地域にどういったモノの動きが存在するのかを調査するというところに大なる興味を抱いた。レンバレンバという山奥の街から更に山の奥にあるヤクロ村での生活が始まる。電気も水道もないのであるから日が暮れば寝るしかなくその分朝は早い。朝食をとると男性は森へ向かい、タロイモ畑とトウモロコシ畑の草取りをして最後に水をやる。金属製のバケツを持って川と畑を何往復もする。

貨幣経済が浸透してない地域でモノの動きを観察する予

定であったが、この村ではモノを所有するという習慣がない。そして、儀式の内容だけを録音して村を去る。そこから、転生と結びつけるように話は進むがこの枚数では掘り下げが難しい。

「アンダーグラウンド・マザー」紅露牙 代理出産という重いはずのテーマをコミカルに描いていて楽しく読めたが読後感は虚しかった。つまり、人間が不在なのである。ストーリーがあつてそれに人物を当てはめているだけの作業しか見えないのである。着眼点の良さを生かしきれなかった。

「シエアメイト」河村直希 小説という不毛地帯に足を踏み入れた和希の苦悩から始まる。労働を終えアパートに戻り缶ビールをあおり小説を書くためにノートパソコンのキーボードを叩き続ける。新人賞の受賞場面を夢想する。だが現実にもどつてみればもう不毛地帯から撤退するしかないときさやくも一人の自分がある。遠い昔に私の辿つた道を見せつけられているようでせつなく読んでいたら、突然に作品の世界に引きづられた。シエアメイトのキムは帰つてこないが坊主頭の男とスーツを着た女が夜中に現れる。そして一気に物語が展開する。書き出しの緩慢さとは裏腹にスピード感があり読者を飽きさせない筆力もある。構成をきちんと整理すれば評価は違ったものになっていただろ

時も頭を離れなかった。一人旅を続けてもずっと付きまわつてくる。二人をつなげているのはスマホのラインだけ。Nから送られてくる画像を眺める。Nの生活が伝わる映像に思いは乱れる。金持ちである両親と合流して旅を続けながらNの東京で働けるかとの問いに狼狽える。突然、エヌを取り巻く一族が現れる。Nの信じる宗教が頭をよぎる。そして、Nを鏡として己の心を照射する。猫はあまり痛みを感じないよう進化したと言う。偏に、生き延びるために。ならば、私も同じよう進化する。

上位三作は驚き

大高雅博



今回初めての新人賞ということ
で、不安はあったのだが、大きな
収穫があったといつて良い。それ
ぞれがかなりの刺激を与えてくれ
た。無論銀華文学賞の作品には円

熟した別の魅力がある事は指摘したいが。

特に上位三作は飛び抜けており、これは驚きであった。

う。

ここから当選作となった作品である。

「桃と煙草」深澤真歩 新橋と銀座の間くらいに位置している小さな喫茶店で働いている私は出会い系で同性のモモと知り合う。いきなりホテルへ行こうと誘うモモは彼氏と別れたばかりで未練がある。しかし未練か性欲かが判らないので、妊娠の心配のない同性と試したいというのが、私にその気はない。仕方なく駅前のフルーツパーラーで閉店まですることになった。夜はバーになる喫茶店ときおり私はモモとの会話を回顧する。不確かなものの上に立つ不安とモモの存在が読者にも桃味として残る仕掛けが秀逸である。ことばのあやつり方が巧みで才気に溢れている。

「光源」北谷ゆり 無音の画面がゆつくりと動く、映しだされるのが何であるかさえ問わない。夜道の静寂を足音だけが乱す。文字の限界に挑むように紡ぎだされる情景はグロテスクなまでに美しくみえる。雄と雌の交わりは肌だけでも保っていけるのだ。言葉ではなく指の巧みさと光の動きでも繋がっていける。万華鏡のように人間の内と外を抽出する筆力に呆然とするばかりだった。生と性の光源を探ろうとする意欲作である。

「赤城休暇」石田夏穂 先週二十八歳になった私はインドネシアの石油化学プラント工事で知り合ったNのことが片書けない作品である。
感覚的な小説であり、ストーリーに余り意味はないが、ネットで知り合った男と思つて会つたところ、女性であり、パフェを食べる。匿名性、関係の希薄感、ネットでの出会いの危険性、人生を突き放した薄っぺらな生活を描きがちだが、この作品は違うようだ。題名から分かるように、最初は味覚、それから聴覚、視覚、五感に訴えているところが成功しているかもしれない。

小説家の安部公房は、比喩は最終的には五感に戻さないと伝わないということをやっている。手元の安部公房の作品を見ているが、例えば「犬はますます興奮して、湿った石鹸のような鼻面を力まかせに押しつけてくる。」「午前七時半……どんな不思議からも、絶対に相手にされない、蒸留水のような時刻」と、言った具合である。
この作品はこれらの五感にせまわつてくるものがあるのだろう。成功しているように思える。

当選作石田夏穂氏の「赤白休暇」は、文章力がある。お互い好き合っているが、家のために結婚ができなくて悩むというのはこの国の何十年前の題材なのだろうかと思う。この国際化した時代にはと思うが、それ故にできあがった小説である。男はインドネシアに住むムスリムであり、大

家族のために給料を稼がなければならぬ。男はムスリムを捨てられない。彼女もムスリムとなる結婚はできない。東京に男を呼び一緒に暮らすことはできる、彼女の収入で男の家族を養うことも可能である。しかし、男は専門職で日本でコンビニのバイトをするよりは、安定している。男と彼女とはかなり大きな賃金格差がある。それが問題なのかもしれないが、女は男を忘れるために旅に出る。しかし、メールを気にしてしまう。これは、政治的な話でも、宗教的な話でもない。どうしても結婚できない女が男を忘れるための小説である。それが成功したかどうかは分からないが、小説は成功している。

当選作北谷ゆり氏の「光源」は不思議な小説である。一昨日、強姦された女が恋人と一緒に警察に行く、それをモノローグで語る。大庭みな子や金井美恵子のモノローグだともう少しヒステリックになると思うが、精霊に犯されたと考える女は客観的な文体で書かれている。

考えて見れば大庭みな子も金井美恵子も、詩人として出発してから小説を書き始めていて、彼女らの小説には詩的な部分があるのだが、この小説は詩的というよりは散文の要素が強くそれが魅力になっていくようだ、一度目は漠然とした感じがあったが、二度目に読むと一つの間にか引き込まれてしまう。この小説は深いのかもしれない。

女か分からないのはマイナスだろう。また、「秉燭（へいしょく）」は恐らくほとんどの人は読めないから、ふりがなは必要と思われる。この小説は題名、内容とも、少し分りにくいと思う。

さて、今回の新人賞において、応募した人の中には何故、これが当選作？ 自分の方が良いと思われる方もいらっしゃるかもしれない。そういう方は、もう一度当選作を読み返して欲しい。今回に関しては、少しの差がある。どこに差があるか考えて欲しい。

描出力、新鮮な泡の味、 得体のしれない感性

八覚正大

「赤白休暇」

これは主人公の成長を描いた教養小説である。主人公の女性は、インドネシアの石油化学プラントの工事に出張した。そこでNという



う、末端の仕事に従事しながら健気に働く現地の青年が好

奨励賞の中山喬章氏の「転生」は伝奇ものになるのだろうか、フィールドワークに行った研究者にまつわるものだが、この結末には驚いた。初めて見る結末である。視点が面白い。ただ、結末が面白すぎるので気になるのは、最近インターネット上に色々な話が流れているという。それを適当に取ってきて別のところに応募する輩がいるということ。そんなことをしてもすぐに分かるだろうし、書き手にとっては実は新しい物を生み出すという楽しみを奪うことでもある。

日本には星新一という、偉大なSF作家がいた。1000のショートショートを書いたという。彼が凄いところは、その全てが完全なオリジナルということだ。そのため、どの国にも胸を張ってそれらを紹介できるというわけだ。「転生」の作家が決してそうだとはいえないが、次も是非新しい結末を考えてください。

奨励賞河村直希氏「シエアメイト」は、ハードボイルド調の作品で迫力はある。ただ、主人公は小説を書いているが、自嘲気味にありふれたお話といっているが、実はこういう細部に気を遣って欲しい。そうすれば、小説に厚みが出ると思う。

奨励賞芦田孝祐氏「その重さの金と同価値な」は雰囲気のある作品ではある。ただ、例えば、藤田が、最初、男かきになったのだ。しかし、お金持ちの家に生まれ、旅行を好みパスポートを当然のごとく使用する主人公と、家族を大切にし車もなく、貧乏とはいえないまでも、半径二キロ以内の生活圏をほとんど出たことのないN——その成育歴の差に主人公は唖然とする。(私が驚いたのは、言うまでもない。パスポートのない人生は、私には考えられなかったからだ。あの十年ごとに更新する日本語のパスポートは、まさに私の身体の一部であるかのように、濁った血のような色をしている……)

出張から戻り、自分の父母とロシア旅行をする。Nとの違和をなぞりつつ、己の今までの生活を振り返る。(救いようもなく、私は視野が狭かったのだ)と。

そしてNとの行為を振り返り、(あの匂いは、たくさん汗をかいた人間の匂いなのだと。国境も性別も関係ない、よく働き、ちょっと疲れた人間の匂いなのだ)と気づく。(シヤワーを浴びても抜けぬ、独特の籠った匂いは、私に、生きていられると思わせた。こいつと私は生きていて、そのことに良いも悪いもなく、いま、間違いなく生きているんだと思わせた)と。かつて尻尾の骨を剥き出しにしても強かに生きていた猫を思い出し、己をそのサビ猫に投影する。そして進化する決意をもつ。だからこれは、まさしくなかなかの「教養小説」である。

当選作に推したのは、内容と共にその端的にして要を得、かつ自然な描出力に対してでもあった。

（Nは）現場に到着すると、機器ノズルのフランジ面に目を凝らし、傷があれば修繕の手配をし、なければ客先のサインを貰った。その日の指示によっては、蒸留塔の梯子をよじ登り、プラット・フォームのボルトの締め方を、無理な体勢で確認することもあった。何日も、何週間も、何カ月も、物言わぬ熱交換器とか貯蔵タンク……の細部に、Nは真摯な眼差しを向けていた……時には昼過ぎに、事務所脇の喫煙所にいることもあった。そういう時、私は事務所の窓から、やや寛いだ様子のNを見やった。その立ち姿は、横から見ると殊更に薄い。「カマキリ」と私は呟いた

（ある晩、Nはヤマハのクリーム色のバイクでやってきた。私たちの身体は、向かい風の中にいる。時速は、時々五十キロになった。私は右手をNの腹に回し、左手を肩に添えた。……紺のベラベラのパーカー越しに触れる腹は、素の肌に触れている時よりも、実物に近い感じがした。減速と加速の際は、その腹に力が入り、ぐつと固くなった。あんなに痩せているのに……一握りの脂肪が掴めるのは不思議だった）

「光源」

よく分からない部分もある。なぜ誘拐されたのか、そしてという女性。彼女はどこか母親のように接してくれた。お客のジャンボさん。髭を生やした三十代くらいの男。

桃味とか、煙草とか、アイス、パフェ……とかが、その場の淡い感覚を小気味よく伝えては来る。文章はキラキラと撥ね、流れていて新しさを感じさせはする。

（かっこいいゴミ。光より速いゴミ。……あのゴミだってもとはゴミじゃなかったんだ……それが開封された途端にゴミ、と名称が変わる？ 失礼な話だ）（白い今日に倒れ込む。かさぶたを剥がそう）……ただ、新鮮な泡の味、あるいはちよつとした香りの心地よい匂いを嗅いでいるようで、その雰囲気を抜けた存在の感触を作者はどう描くのか、未知数の感じがした。

「シエアメイト」

シエアメイトのキムという半ば不在の人物と、小説家志望の主人公。キムの働いていた職場からの二人の人物の訪問、キムは何か不祥事を起こしたらしい。キムのことを巡って彼らと電話や応対を繰り返す主人公。

深夜公園のベンチにいと二人の警官が近づいてくる。そして、銃による惨殺事件の話をする。ある意味、初対面の関係の希薄な人物たちなのだが、それが坂本とか裕也とか、上島とか、山田とか、過去の同級生塚原とか、名前を持つとどこかこの（物語）の中で、すつと実在感を孕み、

て警察にそれを訴え、事情聴取される。誘拐され何をされたのか……そんなストーリーらしき輪郭はあるが、殆どどうでもよい気もする。それより、この文体はなんだろう。

一行一行、言葉一つ一つが詩的な響きを孕み、読んでいて目に独特な味わいとアクセントを齎（たも）してくる。彼というのも随所に出ては来るが、主人公はこの女性だ。そしてその心身に自ら近づき離れ、ねつとりと見つめ続ける眼差し。

（体は辛うじて均衡を保っているが、重心が痛むように熱い。皮膚を失い、内臓が外気に触れてゆくように熱と冷感とが混合する。赤と白が、血と精液が、炎と白煙が、生と死が体の中心で丸みながら形を成してゆく激情と非力の斑紋。脱皮したばかりの節足動物のように、まだまだ柔らかい。しかし、いずれかならず、非情な、硬質な膜で覆われる）

ちよつとまだ、どこか得体のしれない感性の特異な表現化、でもどんな光源を見せてくれるのか期待し当選作として推した。

「桃と煙草」

新橋と銀座の間くらいに位置している小さな喫茶店で働いている若い女性。その彼女の、他者との交流の淡い記録。男と偽って待ち合わせ場所にきたモモという女性。インターネットで出逢った「火曜日さん」という自分のことを俺

でも消えていく。キムは主人公にマカロフピストルを置いていく。それは警察官山田の語った殺人事件の内容と符合するものだった。ヴァーチャルなものと現実とが入り混じって、しかもそれそのものが小説というような構造。作者の才気と文体の面白さは感じられたが、不在の人物を設定することや、小説の中に小説がある構造は必ずしも新しいものではない。

「転生」

大学院で人類学系の研究室に所属する女子学生の主人公。ニューギニア島のヤロク村に滞在し、そこで現地の体験をする。そこまでは中々読ませた、初めは男性かなと思っていたが……途中で視点が大学の指導教官に変わる。そして「積荷信仰」というものが明かされる。それは神と交信する手段として現代文明にすがる信仰で、外界からの訪問者が儀式に招かれイノブタの子宮を入れた容器を受け取ると、その人が保有しているものを手放したくなるような暗示がかかってしまう……というもの。

なかなか、面白い概念だし、魅力のある話ではある。ただ、「現地」での徹底した関り描写、主人公の女性の生き方への追及、「積荷信仰」、そのどれも中途で終わっている感があり、小説（フィクション）ゆえの「想像力」を駆使した突っ込みとテーマの展開が欲しかった。

第2回 文芸思潮新人賞 作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない尖鋭な小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ● 2021年4月30日時点において39歳以下の者

応募規定 ● 2万字以内。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合はA4を用いること。別紙に①応募部門を明記（第2回文芸思潮新人賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料 ● 2800円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは26USドル。

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「文芸思潮新人賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮新人賞

最優秀賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

優秀賞 ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞 ■ 賞状・賞メダル 佳作・入選 ■ 賞状

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2021年4月30日（当日消印有効）

発表 ● 予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表する。受賞作・優秀作は2021年12月25日発売の「文芸思潮」82号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ● 文芸思潮

※主催者から 新しい世代による新しい小説を読みたい。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て見映えよく覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の根源的な問題が潜んでいる。それを剔出するような新鋭の作品を期待しています。



「アンダーグラウンド・マザー」
俗にいう、代理母の話、しかも引きこもりの女性主人公。ある意味、かなり現代的な話ではあり、発想には興味を惹かれる。ただ（私はため息をついた。たとえどんな理由にせよ、中絶は嫌なものだ。できることなら避けたい……）（こちらは体を張ってやっつてるのだ）（やはり出産に命がかかっているのだ）……などという表現に、観念的な作り物の感じがして、命を生み出すことへの敬虔さ、疚しさのようなのもが希薄に思われた。

「その重さの金と同価値な」
男同士の友情というか、まだ社会へ開ける前の、観念的な言葉による探り合いの小世界。
評者もそんな時代を経験しているので、分からなくはない。ただ（僕は「セックス」という単語を口にしながら、それが何の感情も自分に思い起こさせないことに気づく）（でも、おかしくないことだけは分かる。他人の数学の証明を見た時と同じだ）（あらゆる連絡が相手に伝わっている確率は二分の一だ）……この言葉論理の自閉的世界から抜け出していく主人公を読みたい。

「大根運び」
信春という主人公（小学校一年）の家族のことが描かれている。興味を惹かれるのはYおじさん（主人公の伯父）

で、主人公をかわいがってくれたやくざである。また、レイコ婆というのが、主人公と同じ歳の頃、戦争中で、大根（人の足）を運んだ……という話は、かなり衝撃的ではある。得体の知れない首長の飛行機や、ラスト、伯父さんも頭を割られて死んでいた、というのもインパクトは感じられる。ただ、それらの描写の才は感じられるが、作者が何を描こうとしたのかは伝わってこない。少年の頃、目撃したショックな「原体験」の吐露から、さらにそれが何なのかを読ませてもらいたい気がする。

「河童の一人酒」
なかなか流暢な言葉の使い方は感じられた。ただ「脱つちゃん」という河童（やせ細った120センチの青エゾ河童）を作り出した面白さはあるものの、どうも読んでいて感情移入できなかった。そのためラストの方の恐怖感も伝わってほしかった。作者は河童を通して何を語りたかったのか？

